

一戦必勝

八学光星 3年ぶりの夏

—上—

7月22日の全国高校野球選手権青森大会決勝で八工大一を破り、2019年以来3年ぶり11回目となる夏の甲子園出場を決めた八学光星。思つよもどかしい時期を乗り越えた現3年生は、最後のチャンスでついに初の甲子園への切符をつかみ取った。合言葉の「一戦必勝」を積み重ね、悲願の全国制覇に挑むチームの姿を2回に分けて紹介する。

◇ ◇ 「本当に苦しい試合ばかりだった」。青森大会を振り返り、仲井監督や選手らはこう口をそろえた。初戦から決勝までの5試合中、3試合が1点差。このうちの2試合は、リードを許してから後半に逆転という展開だった。

接戦で勝負強さ発揮 敗戦糧に「当たり前」徹底



ライバルに敗れ続けた悔しさが、成長のばねになった。新チームで迎えた昨秋の県大会は青森山田に0-4点差をつけられ、3位に甘んじた。このままだと『全国制覇』の目標は遠すぎる。目の前の1勝を確実に取りに行く「一戦必勝」を新たな目標に掲げた。失策をなくす、打撃ではボール球を振らないなど、「当たり前」のレベルを上げることを徹底。隙のない、負けないチームづくりを目指した。

夏の県大会決勝で八工大一との接戦を制し、喜びをかみしめる八学光星ナイン。7月22日、弘前市のはるか夢球場

その成果が夏の青森大会で表れた。5試合で2失策と守備が安定したことに加え、東奥義塾との準々決勝では、攻撃で3連続四死球から逆転の好機を生み出した。相手に流れを渡さないため、盗塁死、捕殺、併殺など攻撃のミスも奏功。競り合いを勝ち抜き粘り強さを見せつけた。

「この1年間で選手たちが技術的にさほど変わったわけではない」と評する仲井監督。主将の洗平歩が「秋、春と結果が出なくて本当に悔しかったのが糧になった」と話すように、ナインがくじけず地道に鍛え上げた基礎は、今夏の激戦の中で本領を発揮した。

(野村遥)